

---

# 紅き空

雨空\*。

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅き空

### 【Nコード】

N0769P

### 【作者名】

雨空\*。

### 【あらすじ】

天人と人間の間に  
生まれた主人公

雨音

男として

生きると選んだ

真選組に入隊し

女であること

バケモノであることを

隠しながら

過ごしていくにつれ

土方に惹かれていく…

想ってはいけない

だって私は

バケモノだから…

ブローグ\*。

好きです

貴方が

大好きです

でも

人でない私には

思ひつゝ思ふ

貴方を

ユルサレマセンカ？

汚れた  
汚れた  
汚れた  
漆黒の血

君が知ったら  
なんて思っのたろう

気持ちが悪い - と

近寄るな と



サゲスミマスカ？

人のように人でない

獣のようで獣でない

そう

私はただの

バ  
ケ  
モ  
ノ

銀魂 二次創作  
土方十四郎寄り

検索ワード

銀魂 / 真選組 / 土方 / 沖田 / 近藤 / 山崎  
万事屋 / 銀時 / 攘夷 / 桂 / 高杉

甘く切ない  
物語です

死ネタはございません

描写するうえで  
裏夢のようになるかもしれません

ブローグ\*。(後書き)

誤字脱字

激しいと想いますが

よろしくおねがいします！

出会い\*。

どんよりと曇った  
江戸の空

私はひとり  
歩いていた

追っ手から逃れ  
たどり着いた江戸

武州の田舎とは違う  
活気があり  
賑やかな場所

「はあ……」

深くため息をついた  
これからどうしよう

それだけが  
頭から離れなくて

ふらふらした  
足取りのまま前に進んだ

ドンッ

何かにぶつかった

「オイてめえ どこ見て歩いてやがる」

パンチパー…否  
アフロにグラサンの男に  
ぶつかってしまったようだ

「申し訳ない」

面倒なことになりたくない一心で  
いった言葉

「それで許されたら警察いらねーんだ」

「オウ…確かにいらねえな」

アフロの声が

背後から聞こえた

凄味のある低い声音に掻き消された

アフロの顔からは

血の気が引き

青ざめていく

「す、すすすすいまつせー……んんん」

謝罪をしながら

アフロは逃亡した

「嬢さん ああゆうのには  
気をつけろよ」

煙草の香りが鼻につく  
私を心配しているようだ

「助けてもらわなくても  
あんなに余裕だったのにさ」

振り返らずに悪態をついた

「て…てめえなんだその態度は」

そっぴいなから

私の視界に入ってきた男

黒いジャケット

黒いスラックス

手には煙草

腰には刀

ああ

知ってる

真選組だ…

出会い\*。式

俯いていた顔を上げてみた

整った顔立ち

眉根を寄せ

私を睨む

私も睨み返してみた

「幕府の狗が  
私に関わるなっ」

「てめえ

お上にたてつくなんざ  
いい度胸じゃねーか」

開ききつた瞳孔が  
更に開いた気がした

これはまずい



逃げよう

「度胸なんてないよ  
思った事をただ言ってみただ」

そういい残し

踵を返したと同時に

左腕を捉まれた

少し前のめりになり

着物の袖から露わになった腕には  
無数の切り傷

ケロイド化した傷跡

「……離せ……っ」

俯いたまま放った言葉

「す、すまねえ……」

啞然とした顔？

哀れむ顔？

軽蔑するのか？

あんたも

そう胸に抱きながら

一瞥した彼の表情は

怒りに満ちていた

出会い\*。参

何故

何故怒っているの？

汚いから？

命を粗末にしているから？

「お前、その腕」

男は雨音を睨んだ

「てめえでやったのか？」

雨音は男に背を向けたまま答えた

「知らない、  
貴方には関係ない  
何で怒っているのよ」

「腹が立つんだよ」

煙草を持つ手に力が入る

「汚いから？  
命を粗末にしているから？」

「ちげえよ  
んなこたあ微塵も思っちゃいねえ」

だがな

「やってるのを知ってしまった  
これから、お前はやるだろう  
それを…  
知っていながら止められない事に  
腹が立つんだ …」

「      ツ      ！！？」

悔しそうに  
並びの良い綺麗な歯を

食いしばる男

何故…

何故そんなことを  
思ってくれるの？

「そ、そんなこと  
構わない…」

ありがとう  
」

必死に走った  
泣きそうになった  
歯を食いしばった

後ろから

ごめん

そう聞こえた

何故 彼は謝るのだろう  
何故 彼は怒るのだろう

全てが全てが  
不思議だった

⋮

でも

全てが全て

暖かった

⋮



縁\*。(前書き)

嗚呼、

こんなところに

君は居たのね



ありがとう

出会ってくれて

縁\*。

「はあ、はあ」

どれだけ走っただろう

歌舞伎町まできてしまったようだ

「うう…  
これからどうすれば」

頭を抱え  
その場にしゃがみ込んだ

頭の中は  
先ほどの男でいっぱい

黒い服：

あ、

「真選組で働こう…」

とっさに思いついたこと  
身を隠すため  
男として  
大好きな刀を振るえること

それしかない！！

お金はあるし

刀はないけど

袴さえ調達できれば  
問題ないはずだわ

立ち上がり周りを見渡す

目に入ったのは

万事屋銀ちゃん

「万事屋って確か  
なんでも屋…よね」

顎に手を当てて  
思考回路を張り巡らせる

よし！！！！！



「うるせーんだよ前っ

聞こえてるつつの…てアレ…??」

銀髪の顔が汗ばんできた

「お、おおおおおオンナノコ!!?」

「だ、だったらなによ

大体アンタ!!客になんて態度なのよ」

頬を膨らませ

涙ぐんできた目で更に睨む

「新ハYYYYYYYYYYYY!!」

お客様だ!!!

お通しなさい!!!」

新八と呼ばれた

冴えないメガネが

中から出てきた

「あ、いつらしゃいませっ!

どうぞ 汚いですがあがってください」

ニコツと笑うと

中へ案内してくれた

感じのいい子…

「お…邪魔します／＼／」

ソファアが二つ向かい合い  
間にテーブルのあるシンプルな部屋

糖分 と書かれた額縁

「さぁお嬢さん  
ご用件は？」

銀髪は悪びれるどころか  
何事もなかったかのように  
話し始めた

「と、とりあえず  
ティッシュを・・・」

鼻血が出てきた鼻を抑えながら  
新八君を見た

「あつ！ハイ！大丈夫ですか？  
何故 鼻血が？」

苦笑交じりに問いかけながら  
箱ごとティッシュをくれた

「その銀ば：白髪にやられたのよ」

「なんでそこ言い直したのかな！？  
お嬢さん！！銀髪でいいと思うんだけど  
ねえ！！聞いてる！？」

銀髪、否白髪がほえる

「ちよつと銀さん

女の子に手をあげるなんて  
見損ないましたよ」

新八君は

蔑んだ目で銀さんという男を見た

「あ、いや違うんだって

銀さん

あのーほらアレだよ

うん、アレ！

そうそうアレ！！」

「無視しましょう

で、なにかお困りですか？」

新八君は私に向き直った

「袴がほしいの

あとは結い紐」

「何故またそんなもの…

女性なら着物とか

髪飾りとか…」



訝しげに私を見る

どうしよう…

白髪が目つきがかわる

「事情があるの

男装したいの

お願い新八君！！

袴を買ってきて！！

お金ならたくさんあるの！」

切羽詰った顔をしていたのだろう

押しに負け

理由を聞かずに

買いにいつてくれた

部屋に残されたのは

白髪と私

「お嬢さん

名前は？」

先に口を開いたのは白髪だった

「雨音…

原田雨音です

貴方は？」

「俺は坂田銀時  
銀ちゃんってのが俺だ」

少し得意気な顔をした

「坂田さん  
今回はお願いしますね」

「おう任せな  
しかしまあ男装とはな  
あんまりあぶねーことに  
首突っ込むんじゃねえぞ？」

「あははっ  
大丈夫ですよ  
ありがとうございますっ！」  
私は  
ぎこちない笑顔で礼を言った

「笑えるじゃねえか  
ぎこちねーけど／＼」

ボソツツと  
何か呟いたみたいだった  
聞こえなかった

しばらくして  
新八君が

袴と結び紐を持って帰ってきた

袴代と紐代

依頼料金を適当に払った

ここで着替えさせてもらい  
着物も預かってくれるといってくれた

「ありがとうございます！  
絶対取りにきますからっ」

銀時は雨音を見ると

「うーん…  
どこからどうみても女だ」

「うんうん…」

新八君も同意見のようだ

「ええええ…」

サラシもまいたし  
ばれない筈なのに…

「で、でも仕方ないんです！  
お世話になりましたっ」

長いこと同じ人と

話した事がなかったので  
いたたまれなくなり  
その場を逃げるように後にした

ああああああああああ

私はなんて無礼者なの…  
ごめんなさい  
銀時さん  
新八君

かならず  
お礼しますから

許してくださいっ

日が暮れてきた  
歌舞伎町を後にし

真選組の屯所を探す為  
足を速めた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0769p/>

---

紅き空

2010年11月24日22時00分発行